

《2026 年 5 月 公開サロン（通算 355 回）報告》

スポーツ庁長官感謝状受賞記念

A-GOAL の実践から考える

スポーツで築くコミュニティの可能性と持続性

【日 時】2026 年 5 月 15 日（金）19：05～21：10（終了後は近隣の居酒屋で懇親会 ～23：00 頃）

【会 場】としま区民センター会議室 404 およびオンライン（Zoom）

【テーマ】スポーツ庁長官感謝状授賞記念

A-GOAL の実践から考える「スポーツで築くコミュニティの可能性と持続性」

【演 者】岸卓巨（一般社団法人 A-GOAL 代表理事／日本アンチドーピング機構職員）

田口慧（一般社団法人 A-GOAL ケニア支部リーダー／日立製作所）

【参加者】 ※名前の前の記号は、◎NPO サロン 2002 会員、○会員外のサロファミリー、無印はサロファミリー外
＜対面 11 名＞

○安藤裕一（(株)GMSS ヒューマンラボ）、○内田光侶（PROUDERS 合同会社）、○岸卓巨（一般社団法人 A-GOAL 代表理事／日本アンチドーピング機構職員）、◎嶋崎雅規（国際武道大学）、◎中塚義実（NPO サロン 2002 理事長）、緒方彰大（Kickbase Japan Association）、大野元暉（NPO 法人 二枚目の名刺）、田口慧（一般社団法人 A-GOAL ケニア支部リーダー／日立製作所）、ちょんまげ隊長ツンさん（ちょんまげ隊長）、松井 尊（中央大学大学院総合政策研究科修士 2 年）、小泉裕太
＜オンライン 11 名＞

○赤阪修（阪南大学）、◎小堀徹（サロン会員）、○新谷十穂子（郁文館高校 2 年）、◎土谷享（サロン 2002 理事）、寺崎佑亮（ライフイズテック）、南條翼、◎野村忠明（埼玉ソーシャルフットボール協会運営委員/会社員）、水谷琴乃（JICA 海外協力隊）、もんでんゆうこ（個人事業主）、渡辺加奈（A-GOAL）、渡部拓郎

【報告書作成】松井尊、岸卓巨ほか

注）写真・スライドは、A-GOAL 提供

【キーワード】A-GOAL、アフリカ、スラム、サッカーリーグ、食、コミュニティ、共創、岸卓巨、田口慧



<目 次>

概要：岸卓巨（4/9配信）	2
Ⅰ．自己紹介	3
Ⅱ．A-GOAL動画紹介	3
Ⅲ．KIKKOMAN presents キベラA-GOALリーグ	6
Ⅳ．リーグの成果と国外遠征の取り組み	8
Ⅴ．日本側の運営体制	12
Ⅵ．A-GOALの課題	15
Ⅶ．ディスカッション：活動の成果をどのように測り、発信するか今後に向けて	15
1. 助け合いの関係性を築く（能登地震におけるケニアからの支援）	16
2. 支援を可視化する	18
3. 1人の人生にどれだけ変化を起こせたか	18
4. 参加者数の増加から、一人ひとりの変化へ	19
Ⅷ．ホームレスワールドカップへの挑戦	22
Ⅸ．ケニアでのキックベース普及活動	24
Ⅹ．A-GOALが目指すもの	25
質疑応答	28

概要：岸卓巨（4/9 配信「サロン 2002 通信 5 月号」に掲載）

本セッションでは、コロナ禍を契機にスタートした A-GOAL プロジェクトのこれまでの歩みと現在地をご紹介します。

A-GOAL では、2022 年より、アフリカ・ケニアのキベラスラムで、約 2,000 人の子どもたちが参加するユースサッカーリーグ「キベラ A-GOAL リーグ」を年間を通じて運営しています。子どもたちの居場所づくりにとどまらず、食料支援や災害時の緊急対応など、コミュニティ全体を支える活動へと発展してきました。

こうした取り組みは、キッカーマン、ユニ・チャーム、SARAYA といった企業との連携により成り立っており、2026 年 2 月には「スポーツ庁長官感謝状」を受賞しました。受賞式には、ケニアから「キベラ A-GOAL リーグ」のチェアマンと副チェアマンが初めて来日し、活動の広がりを象徴する機会となりました。

これらの実践を通じて見えてきたのは、スポーツが単なる競技の場にとどまらず、「人と人をつなぎ、社会を支えるハブ」として機能し得る可能性です。

現在、A-GOAL では 2030 年を見据えた中期計画の策定を進めています。「スポーツを通して日本とアフリカをつなぎ、持続可能な社会を築く」というミッション、「心の豊かさと将来への選択肢を持てる環境をつくる」というビジョンのもと、A-GOAL の活動を通してスポーツが社会にどのような価値を生み出し、それをいかに持続可能な形で展開していくかを改めて問い直しています。本サロンでは、その検討過程も共有しながら、参加者の皆さまとの対話を通じて新たな視点やヒントを得る機会としたいと考えています。

当日は、以下のような問いをもとにディスカッションを行います。

- ・ユースサッカーリーグは社会の中でどのような役割を果たしうるのか
- ・その価値を持続可能な形にしていくためには何が必要か
- ・ケニアでの実践を、日本の地域や教育、クラブの現場にどう活かせるのか

A-GOAL の事例を入り口に、「スポーツで築くコミュニティの可能性と持続性」を共に考える機会となれば幸いです。スポーツに関わる方はもちろん、教育、地域づくり、企業活動など、多様な立場の皆さまのご参加をお待ちしております。

I. 自己紹介

岸：改めまして、一般社団法人 A-GOAL 代表の岸と申します。私もサロン 2002 のファミリーの一人で、これまでも何度かこの月例会でお話をさせていただいています。ただ、今回ご紹介する

「KIKKOMAN presents キベラ A-GOAL リーグ」についてお話しするのは初めてになります。本日は、A-GOAL から私と、ケニア支部リーダーの田口が参加しています。リーグの詳細については後ほど田口からお話ししますので、まずは私から簡単に自己紹介をさせていただきます。

私は 1985 年生まれで、今年 41 歳になります。都立小石川高校（現在は中高一貫校）のサッカー部に所属していました。その頃に中塚先生と出会いました。サッカー選手としては決して優秀な方ではありませんでしたが、「グラウンドの外で活躍できる場所を見つけたい」と考え、審判やマネージャーなどの役割に積極的に取り組んでいました。その姿を見ていただいた中塚先生に「面白い奴がいる」と声をかけていただいたのが、私と中塚先生との出会いでした。

2011 年には、JICA 海外協力隊としてケニアの児童鑑別所で活動しました。そこでは、窃盗で逮捕された子どもや保護された子どもたち、重いケースでは殺人で収容された子ども、貧困によって人身売買の被害に遭った子ども、食べるものがなくドラッグに依存してしまった子どもなど、本当にさまざまな背景を持つ子どもたちと出会いました。こうした経験が、現在の A-GOAL の活動の原点になっています。

一方で、協力隊としてケニアへ派遣される直前に発生した東日本大震災も、私の人生に大きな影響を与えました。当時、宮城県のボランティアセンターで運営スタッフとして活動していたのですが、そこには本当に多様な能力や経験を持った人たちが集まっていました。その中で、人が集まり、それぞれの力を持ち寄ることで大きな変化を生み出せるということを強く実感しました。この経験は、現在の A-GOAL の活動にも大きく活かされていると感じています。

協力隊としての 2 年間の活動後は、日本政府が推進していたスポーツ国際貢献事業「SPORT FOR TOMORROW」の事務局に携わりました。東京 2020 大会に向けた準備が進む中、2020 年のコロナ禍において、ケニアでお世話になった方々から「アフリカでは失業者が急増し、多くの人が困っている」という SOS を受けました。その声に応える形で、緊急支援として立ち上げたのが A-GOAL です。

協力隊としてケニアに行ったことをきっかけに、今ではすっかりアフリカと深く関わる生活になりました。去年は、在日アフリカ人の会（ADNJ）より、日本とアフリカをつなぐ活動が評価され、「ADNJ アワード」を受賞しました。また、今年 2 月には A-GOAL としてスポーツ庁長官感謝状をいただきました。



II. A-GOAL 動画紹介

活動の様子をまとめた動画があるので、ご覧いただければと思います。

-----以下、動画部分-----

<https://youtu.be/AUMCNNAGZOs?si=ul725qavsUKk2O5D>

「人と人を繋ぐというスポーツの力を活かして、お互いに困っている時にサポートし合えるような、助け合いの関係みたいなものを今後も作っていききたいなというのが大きいですね。」

「2011 年、青少年活動の隊員として、ケニアで活動していました。」

「私たちはスポーツを通して日本とアフリカをつなげ、持続可能な社会を作るということを軸に活動しています。具体的には、アフリカではケニアとマラウイを中心に活動して、ケニアではキベラスラムという、アフリカで一番大きなスラムの中で、子どもたちが犯罪に巻き込まれたりとか、ドラッグに走ったりすることがないように、サッカーのリーグを開いて子どもたちの健全な育成をサポートする活動をしています。」

「もともとサッカーはケニアで人気のスポーツなんですけれども、なかなか地元の子どもたちが定期的にサッカーができる環境はなくて、空き地でちょっとボールを蹴ったりですとか、あと週末に一日だけの大会があってというようなところだったんですが、我々 A-GOAL として、年間を通して子どもたちが継続的にサッカーができるような場を作りまして、サッカーに来た子どもたちには食事を提供するというこも、この食事とサッカー、二本柱で活動しています。」

「協力隊に興味を持ったのは、大学のゼミの担当の教授がバヌアツという、南太平洋の島国の、そこでサッカー隊員をやっていた人でして、協力隊時代の話だったりとか、バヌアツの話聞く中で、私もバヌアツ行ってみようということで、日本で当たり前としてやっているものがすごく途上国に行くと役立つなというのをその時に経験として感じまして、こういう活動をしていきたいなというところが一番大きいですね。」

「かなりやっぱ自分の人生が変わったきっかけだったなと思いますし、そこでケニアの人たちに色々お世話になったりとか、ケニアの人たちとのつながりができたというのが、今の活動に繋がってるなと思います。」

「きっかけは 2020 年に COVID-19 が流行って、アフリカですごく失業者が増えた時期があります。協力隊の時にお世話になっていたケニアのサッカーの指導者から、何か日本からサポートしてもらえないかということがあったのが一番初めのきっかけで。じゃあその SOS に対して私、日本にいるという状態の中で、A-GOAL という緊急プロジェクトとして立ち上げて、日本でお金を集め、それを送り、現地のサッカー指導者たちが、地域の人たちに配るという活動からスタートしました。その人たちから繋がって、他のクラブでも、こっちの地域でも困ってるからやりたいとか、ケニアだけじゃなくてナイジェリアだったりとか、ウガンダだったりとか。そういった他の国でも食糧支援をやったというのがあります。全部で 1 万人ぐらいの人たちに食料支援するという活動をしました。」

「コロナが落ち着いてから、どんな連携ができるかって言った時に、サッカーリーグがしたいという想いが出てきて、じゃあそのサッカーリーグを A-GOAL としても、サポートしながら一緒にやっていきましょうということで始まりました。」

「A-GOAL の理念として、現地の人たちがアイデアだったりとか、やりたいという思いを持っているものをサポートしようという形でやっています。ケニアの場合は、キベラスラムでもともと子どもたちをサポートする活動をしていたケンというケニア人とコリンズという 2 人の代表が、サッカーリー

グをやりたいって思いがあったところで、そこを我々、日本からサポートするという形で、活動しています。」

「こないだ長官感謝状の受賞で日本に二人が来てたんです。その時、中塚先生と一緒に地元の小学校行ったりとか、一緒に給食食べて。」

「日本サイドとしては、その活動を応援しながら、そこに必要な資金を集めたりとか、現地にいるボランティアとコラボしながら、彼らの活動を応援するというような形でやっています。」

「今これ喋ってるのはコリンズという、副チェアマンですが、彼はもともとキベラスラム出身で、兄弟がすごい多くて、親も育てられないから孤児として、孤児院に入れられてしまったという。で、犯罪とかに走ってたんですけども、仲間が亡くなってしまったことをきっかけに、やっぱこれじゃダメだということで、自分で NGO みたいなのを立ち上げて活動していました」

「今このリーグに 2000 人の子どもたちが出てるんですが、その子どもたち、さっき女の子が並んだのは、選抜チームで、去年隣のタンザニアという国に遠征させて、初の国際大会に出ています。」

「彼ら、普段からスラムで育っているんで、ホットシャワー、温かいシャワーとか経験なくて、タンザニア遠征後に思い出の絵描いてくれと頼んだら、温かいシャワーが出てびっくりして、コーチを呼んだみたいな絵もありました。」

「サッカーリーグをやっていることによって、いろんなケースが出てきてるんですけど、例えば、スカウトの人が見に来て、優秀な子どもたちにスポーツ特待生みたいな形で奨学金を出して、学校に行けるようになったような子どもたちもいます。」

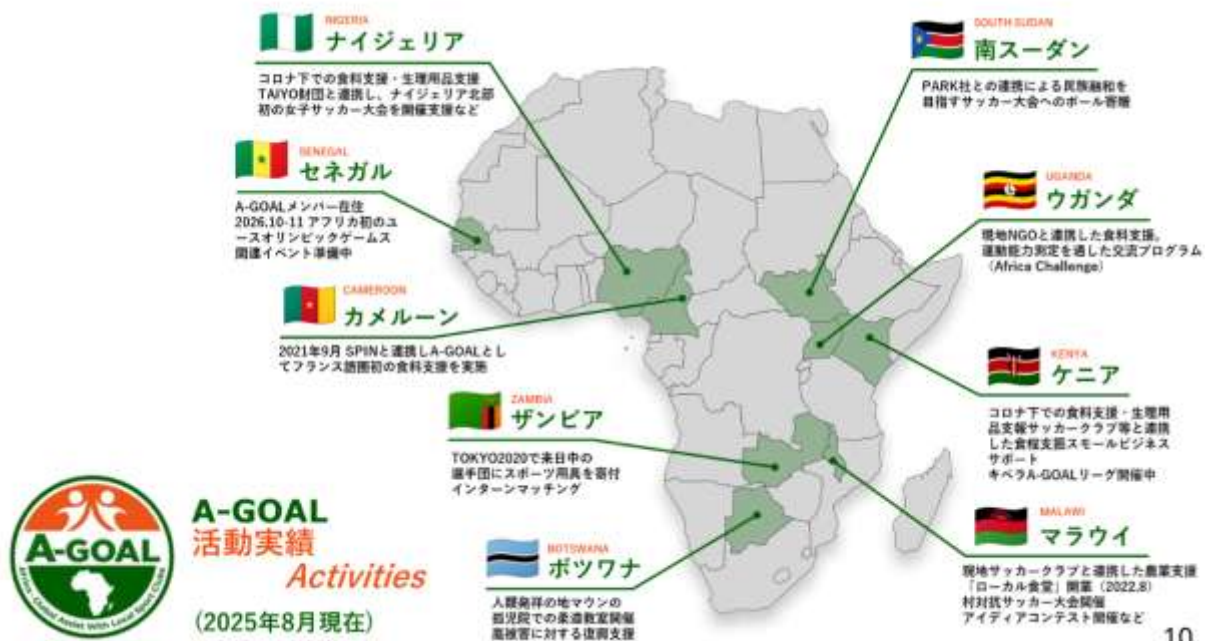
「ケニア、割と就学率は高く、小学校は 8 割～9 割行けてるんですけど、そこから進学していくのがやっぱり結構難しいというところで、学費が払えなくて、上に上がれない子たちがいるというところですね。ただ一方で、今話したみたいにスポーツ推薦みたいな制度があったりするので、活躍を見せられる場を作れば、そういうところに引っかかってくる機会にはなる、というのがあります。」

「彼がケンですね。彼がチェアマンなんですけど、このケンとコリンズというのがツートップで、現地のリーグをやっています。彼はもともとプロのサッカー選手でして、自分はサッカーを通して、学校に行けたりとか、海外に行けたりという経験をしたからこそ、地元の子どもたちに、そういうサッカーを通して夢を持てる機会を作りたいということで、やっています。」

「今 15 歳で、リーグは終わってしまうんですけども、その後の彼らの居場所というのも作りたいなと思ったりとか、他の国でも活動を広げていきたいなと思いますし、A-GOAL が作るアフリカとの繋がりを活かして、日本の社会課題にもアプローチできればもっといいなと思います。」

-----以上、動画部分-----

岸：ケニアの話が今日は中心となりますが、別のマラウイという国では地元のサッカークラブと一緒にレストランをやっています。A-GOAL としては、いろんな国で活動していて、今年はセネガルにスタディツアーをしようという計画もあります。



Ⅲ. KIKKOMAN presents キベラ A-GOAL リーグ

田口：まず自己紹介をさせていただきます。田口慧と申します。A-GOAL では昨年からケニア支部リーダーを務めており、A-GOAL に携わって約3年になります。

私は現在 25 歳ですが、大学入学当初から A-GOAL のような活動に取り組んできました。当時所属していたのは学生団体で、「スポーツ×国際協力」をテーマに活動していました。主な活動地域はカンボジアで、サッカークラブの創設や、農村部におけるスポーツの価値づくりに取り組んでいました。特に、保護者がスポーツや体育の意義を十分に感じていない地域に対して、スポーツの良さや価値を伝える活動を行っていました。

しかし、ちょうど活動時期がコロナ禍と重なったこともあり、国内でスポーツを活用してできることにも目を向けるようになりました。その一つが、在日ブラジル人学校の子どもたちを対象とした活動です。日本に住んでいても外国人として扱われることで生きづらさを感じている子どもたちに対し、スポーツを通じて日本人とのコミュニケーションや交流の機会をつくる活動を行いました。また、児童養護施設で暮らす子どもたちとも、学生とのつながりを活かしながらスポーツを通じた交流を実施していました。

こうした経験を通じて、スポーツが人に与える影響や可能性を強く実感しました。また、大学のゼミではスポーツを通じた社会課題の解決やスポーツビジネスについて学んでいたこともあり、スポーツが地域にもたらす価値や影響について深く考える大学生活を送っていました。

社会人になってからは、スポーツや国際協力の現場からは少し距離を置くことになりましたが、スポーツを通じた地域コミュニティへの貢献は続けたいと考えていました。そんな時にインターネットで A-GOAL を見つけ、活動に参加するようになったという経緯があります。

大学時代の活動は、どちらかというと「きっかけづくり」や「機会提供」を重視したイベント型の取り組みが中心でした。一方で、現在の A-GOAL の活動は、日常の中にリーグをつくり、継続的な居場所や機会を提供するものです。どちらにも良さがありますが、A-GOAL の活動を通じて、継続的な取り組みの価値を改めて実感しています。

本業では株式会社日立製作所に勤務しており、現在はヘルスケア分野における新事業創出を担当しています。日立は過去にヘルスケア事業の一部を売却した経緯もありますが、ウェルビーイング社会の実現に向けて、改めて日立としてどのような価値を提供できるかを模索しています。現在は日立市と共創しながら新たなプロジェクトづくりに取り組んでいます。直接的なつながりはないように見えますが、スポーツを通じたウェルビーイングという観点も含め、本業と A-GOAL の活動の双方から多くの学びを得ています。

ここからは、A-GOAL の活動紹介として、先ほどの動画でご覧いただいた子どもたちやリーグの様子が、実際にどのように運営されているのかについてお話ししたいと思います。

動画でもご紹介したとおり、A-GOAL のリーグは「子どもたちを守るリーグ」としてスタートしました。キベラには学校に通えている子どももいれば、そうでない子どももいます。また、学校に通えていたとしても、週末にやることがなく、保護者も働いているため家で一人で過ごす子どもも少なくありません。

そのような環境の中で、お腹が空けば食べるものがなく、空腹を紛らわせるためにドラッグに手を出してしまったり、食べ物を得るために犯罪に関わってしまったりするケースがあります。

そこでまずは、子どもたちが夢中になれるものをつくること、つまり「暇をなくすこと」を目的にリーグを立ち上げました。また、空腹という現実的な課題にも向き合うため、リーグに参加した子どもたちへ食事を提供し、健全な成長を支えようと考えました。こうした背景からスタートしたのが現在のリーグです。

このプロジェクトの発起人は、ケンとコリンズの二人です。A-GOAL が一から企画したものではなく、彼らが「こうしたリーグを実現したい」と私たちに相談してくれたことから始まりました。ただ、資金面や立ち上げの難しさがあったため、岸さんをはじめとするメンバーとのつながりの中で協力体制が生まれ、現在のプロジェクトへと発展しました。

もともと人と人とのつながりを基盤として始まったリーグが、数年経った今も継続していることは非常に大きな意味があると感じています。

キベラについては映像でもご紹介しましたので詳細は割愛しますが、アフリカでも有数の大規模スラムであり、首都ナイロビ中心部からタクシーで 10～15 分ほどという近距離に位置しています。一步外に出れば都市部が広がる場所ですが、生活環境は私たちが普段目にするものとは大きく異なります。

そのような環境の中で暮らす子どもたちが、週末になると各地からグラウンドへ集まり、リーグが運営されています。

私たちは当初、「子どもたちを守る」という目的から活動を始めましたが、現在は単にドラッグや非行を防ぐだけでなく、キベラが抱えるさまざまな社会課題の解決にも挑戦していこうとしています。

例えば、リーグ参加者の中から奨学金を獲得する子どもたちが出てきています。また、後ほど詳しく紹介しますが、タンザニア遠征や国外ユース大会への出場機会も生まれています。さらに、食事提供に加え、企業との連携による支援も進めており、ユニ・チャーム様との協働による生理用品の提供など、衛生・健康分野の取り組みも実施しています。

リーグという場があることで子どもたちが集まり、さらにその家族にもアプローチできることは、A-GOAL の大きな強みだと考えています。

また、多くの企業の皆さまに活動を支えていただいていることから、今後は日本企業のアフリカ進出支援という側面にも力を入れていきたいと考えています。この点については後ほど具体的にご紹介します。

リーグは当初、1,000 人に満たない規模でスタートしました。しかし、サッカーやスポーツをしたい子どもたちのニーズは非常に大きく、またキベラには多くの子どもたちが暮らしていることから、参加者数は年々増加しています。現在では 2,000 人を超える規模のリーグへと成長しました。

それに伴い、試合数や食事提供数、参加クラブ数も増加しています。今後は、このリーグの拡大にどのように対応していくかが大きな課題です。現地メンバーとの連携をさらに深めながら、持続可能な運営体制について議論を重ねていく必要があると考えています。

2025 A-GOAL リーグ 2nd レグ 報告



参加人数：2034人



総試合数：2,324試合



参加クラブ数：40クラブ
(147チーム)



食事提供数：30,510食

18

IV. リーグの成果と国外遠征の取り組み

先ほども成果について触れましたが、子どもたちがさまざまなチャンスを得られるようになってきたことに加え、リーグそのものを支える基盤も着実に整ってきていると感じています。

リーグを長期的に継続していく上では、資金の透明性が非常に重要です。スポンサーの皆さまと協力して活動を進める中で、支援いただいた資金を見える形で担保できるかは非常に大きな課題です。そのため、資金管理の透明化に向けた取り組みを進めるとともに、現地で運営を担う体制づくりにも力を入れています。

現在、リーグ運営の中心は現地メンバーが担っており、協力者も年々増えています。こうした運営基盤の強化は、リーグの持続可能性という観点でも大きな前進だと考えています。

また、このリーグを支える人材という観点でも新たな成果が生まれています。例えば、リーグで経験を積んだメンバーの中から、公式リーグの審判資格を取得する人も出てきています。リーグでの活動をきっかけに経験を重ね、それが新たな仕事やキャリアにつながる事例も生まれており、リーグの価値は子どもたちだけでなく地域全体へと広がり始めています。

こちらは、先ほどご紹介した国外遠征の取り組みです。遠征に参加できるのは選抜チームのメンバーであり、現時点では限られた子どもたちが対象となっています。しかし、子どもたちにとって非常に意義深い経験になっていると感じています。

この大会には一昨年と昨年に続いて参加しており、昨年は予選リーグを突破したものの決勝トーナメント 1 回戦で敗退しました。しかし今年は女子チームも出場し、女子はベスト 4、男子は準優勝という素晴らしい成績を収めました。子どもたちが持つ大きな可能性やポテンシャルが発揮された大会だったと思います。

コリンズも話していましたが、遠征先で初めてバスタブを見て感動する子どもたちの姿があったそうです。この遠征は、単にサッカーを通じて新しい経験をするだけではありません。自分たちの暮らす

地域や国を飛び出し、外の世界を知る機会そのものに大きな価値があります。

タンザニア遠征



21

また、遠征から戻った子どもたちが、自分たちの経験や思い出をコミュニティの仲間たちに共有することも重要です。実際に遠征へ参加できなかった子どもたちにとっても、仲間の体験を通じて外の世界を知り、新たな夢や目標を描くきっかけになっているのではないかと思います。

先ほど映像でもご覧いただきましたが、ここで実際に遠征へ参加した子どもたちの様子をご紹介します。まずは、遠征に出場した女子チームのキャプテンからのメッセージです。約 1 分ほどの映像になりますので、ぜひご覧ください。

-----以下、動画部分-----

<https://youtu.be/mQHcMt8Zu6o?si=1iQJpipBvDB1riHp>

訳「アルーシャに行けて感謝しています。才能を発揮する機会をありがとうございます。ここにいれば私たちはそのスラムの代表としていられるけれども、スラムにいたらいろんな危険があったりとか、時間を持て余して犯罪に巻き込まれたりとか、そういうこともあったり。このような機会をいただけてありがとうございます。」

-----以上、動画部分-----

タンザニア遠征



22

こうした遠征の機会は、子どもたちに新しい経験をもたらすだけではありません。日本の皆さまからの支援によって自分たちが大会に参加できていることを改めて実感する機会にもなっています。

私たち A-GOAL は、単に支援を届けるのではなく、「人と人とのつながりをつくること」を大切にしています。その意味でも、この遠征は日本の支援者の皆さまと子どもたちとのつながりを感じられる貴重な時間になったのではないかと思います。

実際に、クラウドファンディングで特定のコースを選択してくださった支援者の方々には、子どもたちが描いた絵をお届けしました。これは、遠征に参加した子どもたちに「一番印象に残った場面」を絵で表現してもらったものです。

ご覧いただくと山の絵が多いことに気付かれるかもしれません。しかし、それは子どもたちにとって大きな意味がありました。「こんなに大きな山を間近で見たのは初めてだった」と話す子どもたちもいたのです。

もちろん、大会での試合やプレーが最も印象に残ったという子どももいます。一方で、遠征先で食べた食事、初めて見た景色、仲間たちと過ごした時間などを描いた子どももいました。

この取り組みを通じて改めて感じたのは、心に残る体験は子どもによって本当にさまざまということです。同じ遠征を経験していても、何に感動し、何を大切な思い出として持ち帰るかは一人ひとり異なります。

だからこそ、このような遠征には大きな価値があります。サッカーの技術向上や大会参加という枠を超えて、子どもたちの世界を広げ、新たな可能性に触れる機会を生み出している。そのことを、私たち自身も改めて実感する機会となりました。

遠征参加者の思い出イラスト

遠征で印象に残ったこと・思い出をイラストにしてもらいました。
サッカーはもちろん、キリマンジャロ山や食事。温かいシャワーは生まれて初めてという子もいました。



25

先ほどもお話がありましたが、今後リーグをどのような方向へ発展させていくかを考えたとき、私たちは単にサッカーをする場を提供するだけではなく、さまざまな機会を生み出すプラットフォームとしての役割を強化していきたいと考えています。

例えば、子どもたちに教育の機会を提供することもその一つです。また、リーグでは食事提供を行っているため、調理を担う方々がいますし、試合運営には審判も欠かせません。リーグを支えるために、本当に多くの方々が協力してくださっています。現在はまだ限られた範囲ではありますが、こうした運営に関わる方々に対して謝金をお支払いしています。リーグを通じて地域の中に仕事を生み出し、人々の生活を支えることも、私たちが大切にしている価値の一つです。

また、私自身が A-GOAL の大きな強みだと感じているのが、災害時の緊急支援です。A-GOAL の活動そのものも、コロナ禍における食料支援から始まりました。ケニアでは火災や洪水が発生することも少なくありません。インフラが十分に整備されていない地域も多く、一度災害が起きると被害が大きく広がりやすい現状があります。A-GOAL は現地に強いネットワークを持っているため、必要な場所へ迅速に支援を届けることができます。こうした緊急支援の役割は、いつか終わるものではありません。日本と同じように、災害はいつ起こるか分からないからこそ、今後も継続して取り組んでいくことが重要だと考えています。

そして、私たちが目指しているのは、単なる支援の関係ではなく、日本とケニアの間に持続的なつながりを築くことです。実際に、これまでの交流を通じて、ケニアの人々が日本の出来事にも関心を寄せてくれるようになっていきます。日本で困難な状況が起きた際には、彼らが気遣いのメッセージを送ってくれたり、何か力になれないかと声をかけてくれたりすることもあります。

支援する側・される側という一方向の関係ではなく、お互いを思いやり、支え合う関係が少しずつ育まれてきています。そうした意味でも、日本とケニアの間には年々より良い関係性が築かれてきているのではないかと感じています。



このような形で、私たち A-GOAL は主に資金面の支援と、その資金が現地で適切に活用されているかを確認する役割を担っています。また、現在支援してくださっている方々や、これから支援いただきたい方々に向けて活動の意義や成果を発信し、活動の輪を広げていくことも重要な役割です。

一方で、現地のメンバーにはリーグの運営や支援活動の実施など、実際に現場で活動を届ける役割を担っています。昨年までは、発起人であるケンやコリンズが所属する現地団体と連携しながら活動を進めていましたが、昨年からは新たな体制へ移行しました。A-GOAL の現地組織として「A-GOAL Kenya」を設立し、ケニアの CBO（Community Based Organization：地域コミュニティ組織）として正式に登録しました。現在は、この A-GOAL Kenya と連携しながら活動を進めています。

V. 日本側の運営体制

では、日本側はどのような体制で活動しているのかをご紹介します。私はケニア支部リーダーを務めていますが、日本側では主に「ケニア班」が活動の中心となっています。

ケニア班では、リーグ運営に関わる資金管理を行うとともに、その活動内容や成果を発信する広報活動を担当しています。また、現地とのコミュニケーションや調整を行う現地連携の役割も担っています。さらに、多くの企業や個人の皆さまにご支援いただいていることから、既存のスポンサーとの関係構築や、新たな支援者とのつながりを広げるための「パートナー班」も設けています。加えて、近年増えている企業との連携事業に対応するため、企業連携に関する役割も強化しています。

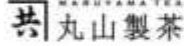
もう一つ重要な取り組みが、人材育成です。現地に長期間滞在できるメンバーを確保することは簡単ではありません。そのため、学生インターンや留学中の学生と協力しながら活動を進める体制づくりにも力を入れています。

単に活動を手伝ってもらうだけでなく、A-GOAL での経験を通じて学びを得たり、将来のキャリアにつなげたりする機会を提供したいと考えています。

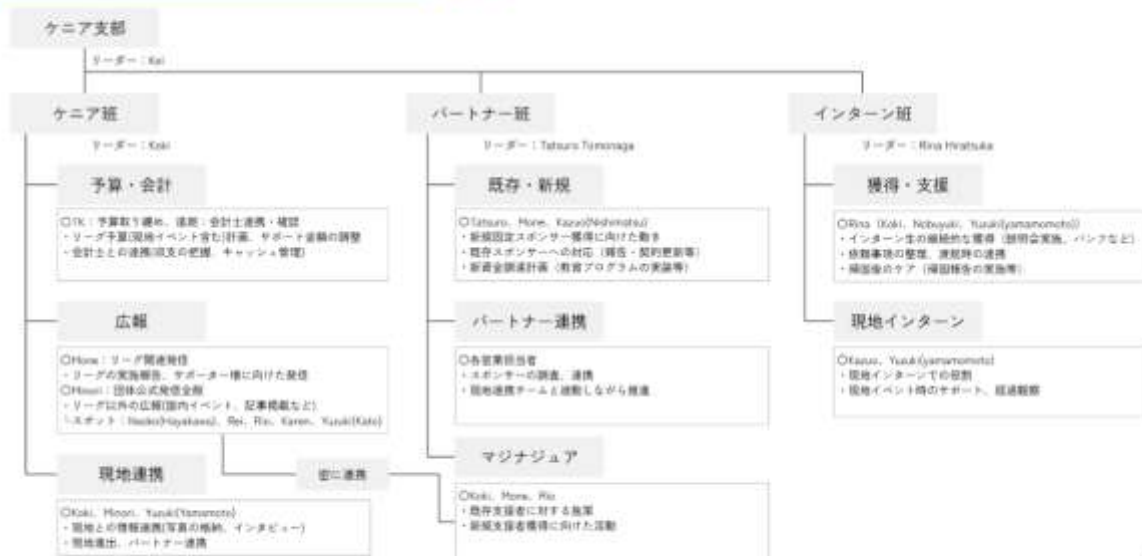
もちろん、こうした体制づくりはまだ発展途上であり、うまく機能していない部分もあります。しかし、その都度見直しや改善を行いながら、より持続可能な組織づくりを目指して、今まさに取り組みを進めているところです。

2025リーグパートナーの皆さま

ネーミングライツ：キッコマン株式会社 様

 キッコマン株式会社 様	 サラヤ株式会社 様	 丸山製茶株式会社 様	 ユニ・チャーム株式会社 様
 株式会社 平八 様	 株式会社 尹久文化 様	 株式会社 クロストレード 様	 SORA TECHNOLOGY株式会社 様

リーグの運営体制



28

こちらはおよその予算規模を示したものになりますが、リーグ運営には半期でこれくらいの費用がかかっています。こうした費用は、後ほどご紹介する企業の皆さまからのご支援を中心に賄われています。また、企業だけでなく、個人の支援者の皆さまからも継続的なご支援をいただいています。

子どもたちへの食事提供や大会運営、現地スタッフへの謝金、遠征機会の創出など、リーグを継続していくためには安定した資金基盤が欠かせません。

多くの方々からのご支援によって、子どもたちに安全な居場所や成長の機会を届けることができます。改めて、こうした活動は支援者の皆さまとの協働によって成り立っているものだと感じています。

2025 A-GOALリーグ2ndレグ費用	
リーグ運営費 （ボール、グラウンド使用料、賞品、応急処置セット、生理用品、人件費など）	635,237円
食事提供費 （コメ、とうもろこしの粉、緑豆、キャベツ、トマト、玉ねぎ、人件費など）	630,741円
その他費用	29,785円
合計（半期）	1,295,763円

1ケニアシリング=1.23円（2026年1月25日）



先ほどお話ししたタンザニア遠征については、かなり大きな費用がかかる取り組みになるため、昨年はクラウドファンディングも実施しました。

ただ、クラウドファンディングは単にお金を集めるだけではなくて、新しく A-GOAL の活動を知ってもらうきっかけになったり、支援してくださる方々と活動の方向性を共有したりする機会にもなっているのではないかと思います。そういった意味でも、資金調達という側面だけでなく、A-GOAL の活動や想いを広げていくための重要な取り組みの一つになっていると感じています。



VI. A-GOAL の課題

A-GOAL はさまざまな形で活動に注目していただいております、現状としては順調に進んでいるように見える部分もあるかと思いますが、ただ、私自身はまだ多くの課題があると感じています。

例えば現場レベルの課題としては、活動が人に依存している部分が多いということです。もともと人と人とのつながりから始まった活動である分、特定のキーパーソンに依存している側面があるのではないかと感じています。もちろん「どんなことがあっても」という表現は少し極端かもしれませんが、仮にキーマンが抜けたとしても、日本側・ケニア側の双方で活動を継続できる体制をつくっていく必要があると感じています。

もう一つは、この後ぜひ皆さまにもご意見をいただきたいところですが、ユーススポーツを通じた活動を発展させていく上で、その効果をどのように測定し、企業や関係者の皆さまに示していくかという課題です。私たち自身も重要だと認識しているのですが、実際に取り組もうとすると非常に難しく、まだ十分にできていないと感じています。

ここは私の方で簡単に整理した内容になりますが、本日お集まりいただいている皆さまや、さまざまな専門機関からもアドバイスをいただきながら、A-GOAL の活動が単に「何人が参加した」という数値的な成果だけではなく、キベラというコミュニティにどのような影響を与えているのか、また子どもたち一人ひとりにどのような変化をもたらしているのかを、今後より分かりやすく示していきたいと考えています。

また、下にも記載していますが、資金面の課題についても、こうした活動の価値や社会的インパクトを適切に伝えていくことができれば、企業の皆さまをはじめとする多くの方々からの理解や共感につながり、より持続可能な運営や資金面での課題解決にもつながっていくのではないかと考えています。

◎現場レベルの課題

- ・ **人に依存する**（キーマンが抜けると、）
→ 持続的な活動にできるようケニア政府、JICA組織との連動が必要。
ただし、スラム地域の特性では難しい場合もある。。
- ・ **効果測定や人材開発の成果出しの難しさ**（活動の効果をどこに置くか）
→ 大学機関・研究機関との連携

◎構造的な課題

- ・ 資金が短期的な回収目標になっている
- ・ 人の善意で成り立っている現状

VII. ディスカッション：活動の成果をどのように測り、発信するか

田口：今回、ディスカッションということで、二つほど問いを用意させていただいています。

まず一つ目が、先ほどお話ししたユーススポーツ、そして A-GOAL リーグの活動価値をさらに最大化していくために、どのような効果測定や指標が必要なのかという点です。企業の皆さまや支援者の

方々、あるいはまだ活動を知らない方々に対して、どのような価値を示していくべきなのかを議論できればと思っています。

課題として感じているのは、先ほどもお話ししたように、コミュニティへのインパクトや子どもたちへの影響をどのように捉え、どこに価値の指標を置くかという点です。まずは、どのような指標が必要なのか。そして、その指標を測定したり分析したりするために、どのような組織や機関と連携できそうか。そういったアイデアも含めて、ご意見を伺えればと思っています。

岸：少しだけ補足をさせていただきます。先ほどタンザニア遠征に参加した女の子たちの映像を見ていただきましたが、現地の女の子たちが置かれている状況についてお話ししたいと思います。

ケニア、特にキベラスラムでは、生理用品を購入すること自体が大きな負担になっています。費用がかかるため、布などで代用しているケースもありますが、衛生面の課題もあります。本当は生理用品を使いたいと思っても、それを購入することができない子どもたちが少なくありません。その結果、生理中は学校へ行けなかったり、仕事に行けなかったりすることがあります。

さらに深刻なケースとして、生理用品を購入するためのお金を得るために、自分の身体を売らざるを得ない女の子たちもいます。これは現地で大きな社会課題の一つとなっています。

そのような状況の中で、私たちは現在、生理用品を定期的に配布する活動を行っています。しかし、本当に目指したいのは、そうした問題の根本的な解決です。そこに向けて、今後さらにできることを考えていきたいと思っています。

もう一つ、A-GOAL の理念である「スポーツで日本とアフリカをつなぐ」という点についてもお話ししたいと思います。

今の活動だけを見ると、日本がキベラの子どもたちを支援している活動に見えるかもしれませんが。しかし私たちが目指しているのは、一方的な支援ではなく、相互につながり合う関係です。

ケニアでは、中国の存在感が非常に大きく、日本については「日本ってどこにあるの？」という子どももいるような状況です。そんな中で、キベラ A-GOAL リーグの子どもたちは「日本の人たちと一緒に活動している」という意識を持っています。ユニフォームの両袖にもケニアと日本の国旗を入れて活動しています。

私たちは、こうしたつながりをこれからも広げていきたいと考えています。

実際、その兆しは少しずつ見え始めています。一昨年、能登半島地震の際には、ケンから連絡がありました。ケニアでもニュースを見ていたようで、「日本で大きな地震があったと聞いた。私たちからも寄付をしたい」と申し出てくれました。

そこで寄付をいただき、せっかくサッカーを通じたつながりの中でいただいた支援だったので、どこに届けるのがよいか考えました。その際、ちょんまげ隊長ツンさんの活動を知っていたこともあり、寄付を託させていただきました。

ツンさん、もしよろしければ、その時のことを一言お願いできますでしょうか。

1. 助け合いの関係性を築く（能登地震におけるケニアからの支援）

ちょんまげ隊長ツンさん：2024 年 1 月 1 日に石川県で地震と津波の災害がありました。実はそこが大きくクローズアップされていますが、その前の 2023 年のゴールデンウィークにも珠洲市で地震があり、私はその時から屋根の修繕ボランティアとして現地に入っていました。

その後、2024 年 1 月 1 日に能登半島地震が発生しました。ちょうど多くの方が国立競技場でサッカーを観戦していた日の夕方でした。私は 1 月 6 日に現地入りし、支援活動を始めました。

私は 2011 年の東日本大震災をきっかけに災害支援に関わるようになり、これまで 15 年間で延べ 200 か所ほどの被災地に足を運んできました。その経験の中でも、能登は本当に大変な状況でした。発災後の最初の 3 か月ほどは、公的な食事提供が十分に行き届かず、水も出ないためお風呂にも入れないという状況が続いていました。もちろん、食事や住環境、雨風をしのぐ場所など、生きていく上で最も重要な支援は必要です。ただ、私たちはそうした部分については大規模な支援団体にお任せして、自分たちは「楽しいことボランティア」を得意分野として活動していました。



ちょうど 2 月に、ツエーゲン金沢の新しいスタジアムのこけら落としがありました。人生の中でスタジアムのこけら落としに参加できる機会是这样多くありませんし、地域に 100 億円規模のスタジアムができるというのも一度あるかないかの出来事です。「これは子どもたちにとって大きな機会になる」と思い、募集を始めました。

私たちが支援していたのは能登半島の先端部にある珠洲市、輪島市、能登町といった奥能登地域です。そこにはサッカーを頑張っている子どもたちがたくさんいますし、保護者の皆さんも疲弊していました。そこで、「みんなをバスで招待しよう」という話になりました。

最初はマイクロバス 1 台程度で考えていたのですが、話を進めるうちに、「お風呂に入れていない」という話が出てきました。それなら金沢に行く途中でお風呂にも入ろうと。また、「奥能登にはファストフード店がない」ということで、「マクドナルドも楽しんでもらおう」という話にもなりました。そうした企画を進めていくと、最終的には 80 人ほどの申し込みが集まりました。人数が増えれば当然予算も膨らみます。かなりの金額が必要になり、「これはどうしよう」と悩みました。でも、子どもたちが本当に楽しみにしている様子が伝わってきました。

そこで SNS を通じて発信したところ、多くのサッカー関係者やサポーターの皆さんから支援をいただきました。

その中で特に驚いたのが岸さんからのご支援でした。私は以前から岸さんの活動を知っていましたし、アフリカの支援活動も続けられていることを知っていました。正直なところ、「アフリカにも大きな課題がある中で、その募金を受け取ってよいのだろうか」という葛藤もありました。

しかし、現地の皆さんが「日本のために役立ててほしい」と言ってくださっているのであれば、その思いを受け取ろうと決めました。先日たまたまお会いする機会があり、その時に改めてお礼をお伝えしました。その話をすると、ケンさんやコリンズさんも本当に喜んでおられました。

私は、この出来事にはとても大きな意味があると思っています。人は支援してもらうだけでは、自尊心が傷ついてしまうことがあります。でも、支援を受けながらも、誰かを支える側にもなれる。そうした関係性がある初めて、本当の意味で対等な人間関係が生まれるのではないのでしょうか。



私たちはネパールでの支援活動も 10 年以上続けていますが、ネパールから支援を受けることもあります。そうした「お互いさま」の関係が実際に生まれることの価値を、今回改めて感じました。

そして、そのような関係を生み出している A-GOAL の活動から、私自身も多くのことを学ばせてもらっています。今では、さまざまな団体とつながり、協力しながら活動していくことの大切さを強く感じています。

岸：スポーツのつながりの中でいただいた寄付だったので、できるだけ顔が見える関係の中で活用したいという思いがありました。実際に、能登へ向かうバスの中ではケンからのメッセージを流していただいたりもして、そうした形でつながりをつくることができました。

こういった取り組みは今後もどんどん増やしていきたいと思っていますし、その中で、先ほど田口くんからも話があったように、「この活動にはどんな価値があるのか」ということを、対外的にも見える形にしていくことが大事だなと改めて感じています。

2. 支援を可視化する

ツン：ちょっと一つ補足してもいいですか。僕は可視化ってすごく大事だと思うんです。日本人はあまり自分たちの活動をひけらかさない文化がありますが、僕らはしっかり可視化するようにしています。

例えば、能登の支援活動で使ったバスや炊き出しの場面でも、A-GOAL さんのお名前をきちんと掲載させていただいています。実際、このバナーを使って 5,000 食ほどの炊き出しも行いました。そのたびに、「こういう方々が関わってくれているんだ」ということを伝えています。

もちろん、一度だけ 1 万円寄付してくださる方もいます。でも、それ以上に大事なのは、多くの人がこの活動に関わっているという事実だと思っています。こうやって可視化することで、「次は自分も応援してみよう」と思う人が出てくるんですよ。

岸さんがおっしゃったように、何でも日赤や大きな団体に寄付するだけではなくて、実際に活動している人たちに気持ちを届ける。僕はこれが「21 世紀型の寄付」だと思っています。

僕の本にも書いたんですが、小さな団体ほど、支援の意味は大きいんです。例えば大きな国際機関に 1 万円寄付しても、その後どう使われたかが見えないこともあります。でも、こういう活動をしている人たちに 1 万円寄付すると、「自分たちの活動を知ってくれているんだ」と感じられる。

それって、お金以上の価値があるんです。ボランティアは基本的にお金という対価を受け取らない活動です。だからこそ、活動を知ってもらえること、応援してもらえること、感謝してもらえることが大きな励みになります。

ドネーションをいただくことで、「もう少し頑張ろう」と思える。自己肯定感が高まるんです。だから、皆さんがアフリカで取り組んでいる活動も、こうして見てもらうこと、話を聞いてもらうこと、表彰されること、それらすべてがお金以外の大切な対価なのではないかと思います。

岸：ありがとうございます。皆さんからも、「この活動をどう評価していくか」というテーマに限らず、ご質問やご意見があればお聞きしたいと思います。オンラインの皆さんもぜひお願いします。

3. 1 人の人生にどれだけ変化を起こせたか

大野元暉（NPO 法人 二枚目の名刺）：お話を聞いていて思ったのは、キベラのリーグは人数がどんどん増えていて、それ自体は本当に素晴らしいことだと思います。ただ、人数が増えたことだけが価値ではなくて、その人の人生がどれだけ変わったかということの方が大事なのではないでしょうか。もちろん「何人参加した」という指標も必要ですが、それ以上に、一人ひとりの人生にどれだけ深く関わったかということ、何らかの形で示せると、一番伝わりやすいのではないかと感じました。

田口：ありがとうございます。本当にその通りだと思います。私も普段の仕事柄、どうしても規模の拡大や人数の増加に目が向きがちなんですが、1 人の人生にどれだけ変化が起きたかという視点は非常に重要だと感じました。また、ツンさんがおっしゃったように、具体的なストーリーとして「何が起きて、どんな変化があったのか」を伝える方が、皆さんにも伝わりやすいですし、共感も生みやすいと思います。とても参考になるご意見をいただきました。ありがとうございます。

嶋崎雅規（国際武道大学）：先ほど、サッカーをきっかけに特待生として進学できた子どもの話がありましたよね。あれは非常に分かりやすい成果だと思います。もしその子が将来プロ選手になったりすれば、さらに大きな価値として見えるようになると思います。

また、就学支援も非常に良い取り組みだと思います。スラムに暮らす子どもたちが学ぶ意欲を持ち、実際に学び続けられるように奨学金などで支援することは、その子の人生を変えることにつながります。外部に活動を説明する際にも、とても分かりやすい成果になるのではないのでしょうか。

一方で、お金の面では日本の存在感は以前より小さくなっていると感じています。国際武道大学でも長年カンボジアで活動していますが、中国資本の影響力は非常に大きくなっています。

だからこそ、お金ではなく何を残すかが重要だと思っています。

私たちはカンボジアで体育授業の導入支援や教員養成を行っています。それによって子どもたちが初めて運動会を経験したり、身体を動かす楽しさを知ったりする。そういう価値こそが、日本が残せるものだと思います。それは A-GOAL の活動にも通じる部分があるのではないのでしょうか。

岸：ありがとうございます。就学支援という観点で言うと、ケニアは今まさに教育制度の大きな転換期を迎えています。これまでは「8-4-4 制度」だったのですが、現在は日本と同じような「6-3-3 制度」へ移行しています。以前は 8 年間の初等教育までは比較的多くの子どもたちが通えていましたが、その後の進学が難しい状況がありました。ところが制度変更によって、今度は 6 年終了後の進学が課題になっています。

一方で、新しい制度では高校段階で文系・理系に加えて「アート／スポーツコース」が設けられ、スポーツに才能のある子どもたちにも進学の道が開かれています。ただ、実際には才能があっても大会に出るお金がない、自分をアピールする機会がないという理由で、その道に進めない子どもたちもいます。A-GOAL としても才能のある子どもたちがスポーツコースへ進めるようなサポートをしたいと考えています。

4. 参加者数の増加から、一人ひとりの変化へ

緒方彰大（Kickbase Japan Association）：日本でキックベース協会を立ち上げ活動している緒方と申します。ケニアに知人がいることからケニアでもキックベースを普及させる活動をしたいと考える中で A-GOAL に出会いました。

感想というよりは質問になります。

A-GOAL の活動について、定量的な評価と定性的な評価という観点で、今は特に定性的な評価が論点になっていると思うのですが、今回パンフレットを拝見していて、定量的な成果だけを見ても、非常に大規模に活動が拡大していると感じました。

そこでお伺いしたいのは二点あります。

一つ目は、2020 年以降の約 6 年間で、どの程度の規模で成長してきたのか、定量的な伸びについてです。

もう一つは、その定量的な成長に対して、実感としてどの程度の定性的な成長や価値創出があったと感じているのかという点です。

また、ツンさんに被災地支援についても同様に、定量的な成果と定性的な価値をどのように捉えているのか、お聞きしたいと思います。

田口：定量的な伸びについてですが、2022年にトライアルリーグを開始しました。当初は参加者が600人程度で、カテゴリーも3つしかなく、比較的小規模なスタートでした。また、当時は食事提供もまだ行えていない状況でした。

そこからの変化でいうと、半期ごとにおよそ400人ずつ参加者が増えていくような形で拡大してきました。

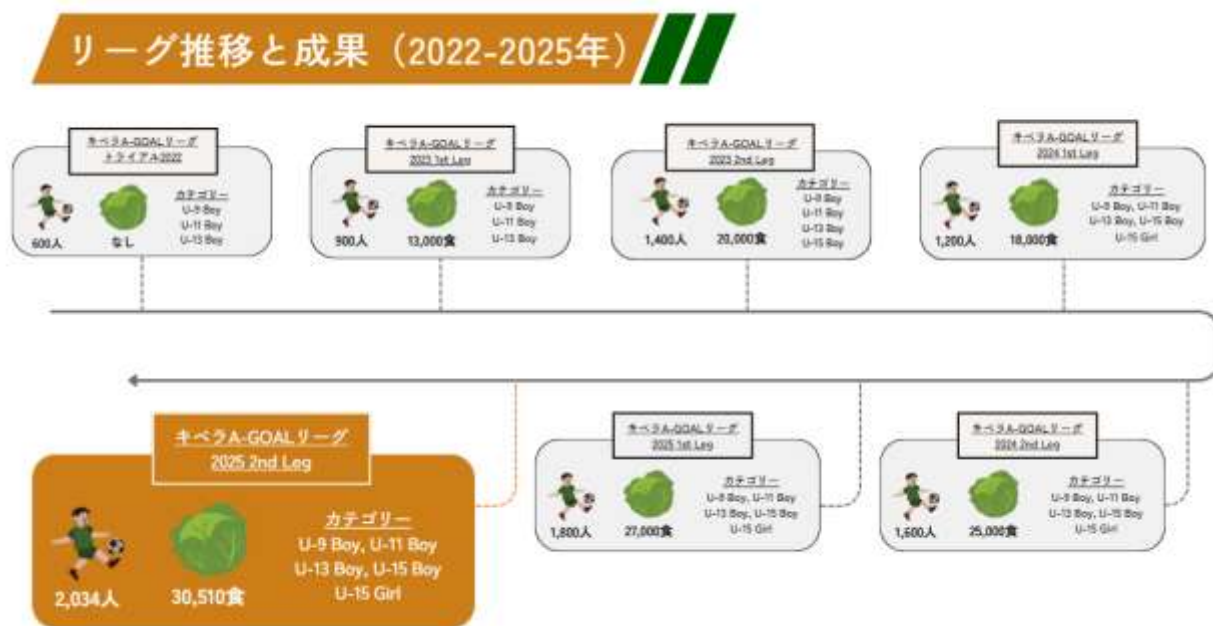
分かりやすい成果の一つとしては、奨学金を獲得する子どもたちが増えてきていることです。もちろん参加者数の増加も関係していますが、リーグでの活動をきっかけにスポーツで評価され、進学や奨学金につながる子どもたちが増えてきていることは、一つの定量的な変化だと思っています。

一方で、定性的な変化については、正直に言うともまだ十分に追えていないというのが私の実感です。今日皆さんのお話を伺いながら、まさにそこが課題なのだと改めて感じました。

活動が拡大する中で、数字として見える変化は追えていても、実際に子どもたちの生活がどう変わったのか、一人ひとりにどんな変化が起きたのかという部分については、まだ十分に把握できていないと感じています。

もちろん、企業からの問い合わせが増えていたり、外部からの評価が高まっていることなどは間接的な変化としてあります。しかし、子どもたち自身にどのような変化が起きたのかという部分は、まだ十分にできていません。

今日いただいたご意見を、今後の活動につなげていきたいと思っています。



ツン：災害支援の話で言うと、僕らは基本的にボランティアです。

行政が担うべき部分は行政がやる。そのセーフティネットからこぼれ落ちてしまった部分を民間が支えるというイメージで活動しています。予算もない中で、本当に手弁当でやっているのだから、評価手法をきちんと構築している団体はあまり多くないというのも現実だと思います。

僕自身は、15年間で延べ200か所以上の被災地に行っています。でも正直なところ、「誰かを救った」という実感はありません。僕は医者ではないので命を救ったことはないですし、弁護士や公認会計士のように法律で人を守ることもできません。

ではボランティアに何ができるのか。例えば、大雨や地震で家の中に 10 トンの泥が入ってしまったとします。普通なら心が折れてしまいます。でも、そこに学生ボランティアが 10 人来てくれたら、一日でその泥を出すことができるんです。そうすると、「もう無理だ」と思っていた人が、「家を直してみようかな」と思えるようになる。

僕らがやっているのは、そういうことなんです。誰かの人生を劇的に変えるわけではないけれど、もう一步前に進むための背中を押すことはできる。それがボランティアの価値なのかなと思っています。また、日本では災害時に支援が当たり前に届くと思われがちですが、実際はそうではありません。能登でも、発災から何か月も経ってなお、段ボールベッドや段ボールのパーテーションで生活している人たちがいました。

そんな中でも、学生や社会人、スポーツ関係者が現地に来てくれることが大きな力になります。

災害支援だけではなく、キックベースのようなスポーツ交流でも良いと思うんです。

そうした関わりが、人と人とのつながりを生んでいくのだと思います。

中塚義実（NPO サロン 2002 理事長）：感想になりますが、率直に言って本当にすごいなと思いました。立ち上げ当初のお話は聞いていましたし、先日ケンとコリンズが来日した時にも実際に会いました。

でも、今日こうして当事者の声や具体的なエピソードを聞いて、改めて活動の重みを感じました。

数字もちろん大切ですが、私はどちらかというと個々のエピソードの方が強く心に響きました。

被災地支援についても同じで、ニュースでは伝わらない現場の声が非常に印象に残りました。だからこそ、こうしたエピソードを集めて発信していくことが大事なのではないかと思います。

私は長年教員をしていましたが、体育でも評価のあり方は常に課題でした。数字を求められるあまり、本来の活動が評価のための活動になってしまうこともあります。本当に大切なのは、一人ひとりがどう変わったかということです。ただ、それは短期間では見えません。だからこそ、数字だけではなく、一人ひとりの変化や物語を丁寧に集め、それを共有していくことが重要なのではないかと思います。

岸：まさに今お話しいただいたような「エピソードを集めて伝えること」も大切ですし、一方で活動を継続するためには資金も必要です。

幸い、A-GOAL はさまざまな企業とのつながりが広がってきています。

例えば、選抜チームのユニフォームのメインスポンサーは KIKKOMAN さんです。また、ユニフォーム胸部分にはユニ・チャームさんにもご支援いただいています。

ユニ・チャームさんはアフリカ市場への展開を進めていますが、商品開発のためには、スラム地域でどのような商品が求められているのか、あるいはケニアの子どもたちの身体的特徴はどうか、といった情報が必要になります。しかし、民間の調査会社はリスク面からスラムでの調査を敬遠することも少なくありません。そこで私たちはリーグのネットワークを活用し、保護者や子どもたちに協力いただきながら、アンケート調査や身体計測などを実施しています。

また、ドローンを活用してマラリア対策に取り組むソラテクノロジーさんとは、将来的にドローンパイロット育成なども一緒にできないかという話をしています。

さらに、今年 2 月の「アフリカ共創セッション」をきっかけにつながった SPRIX という学習塾さんとは、先週ケニアで学力調査を実施しました。

このように、企業の皆さまからもさまざまな相談や連携のお話をいただくようになっています。

そのため、A-GOAL だけの活動にとどまらず、日本とアフリカをつなぎ、さまざまな挑戦をする人々を結び付けるプラットフォームのような存在になればと考えています。

今は、その構想に向けて少しずつ取り組みを進めているところです。

パートナーとの事業連携



VIII. ホームレスワールドカップへの挑戦

岸：ここからは、A-GOAL がプラットフォームとしての活動を目指す中で繋がりが生まれたアフリカでさまざまな活動に取り組んでいる方々のお話も紹介したいと思います。

今日は緒方さんにもお越しいただいていますし、オンラインではジンバブエから水谷さんにも参加いただいています。せっかくの機会ですので、水谷さんがどのような活動に挑戦されているのか、少し共有いただければと思います。水谷さん、よろしいでしょうか。

水谷：ありがとうございます。「面白いことをやっている人」というご紹介をいただいて、少しハードルが上がっている気もしますが、私は現在、ジンバブエで JICA 海外協力隊として活動しています。

A-GOAL さんと同じように、スポーツを通じた青少年育成に取り組んでおり、私はこれまでずっとバレーボールをやってきたこともあって、バレーボールを通じて子どもたちが非行に走らないように、また時間を持て余して薬物に手を出してしまわないように、特に女の子たちが早期結婚へ向かわないようにということを目的とした NGO で活動しています。

私が所属している NGO では、今年 10 月にメキシコで開催される「ホームレスワールドカップ」に参加する選手たちの引率や資金調達を行っています。今年もぜひ選手たちをメキシコに送り出したいという思いで活動しています。

ただ、資金調達には多くの課題があります。ジンバブエでは資金を集めることが簡単ではなく、実際に大会へ行けなかった年もあります。街中でチラシを配って寄付を集めたり、クラウドファンディングに挑戦したりもしていますが、ページを立ち上げただけで終わってしまうこともありました。

私自身、協力隊として活動する中で、「自分に何ができるだろう」と考え続けています。その中で、継続的な資金調達のためには、支援者の方々にどのように伝えれば共感してもらえるのか、どのような画像が人の心を動かすのか、クラウドファンディングを始めた時にどのような広報が効果的なのか、といったことを試行錯誤しています。

現在は現地メンバー2名と私の3人でチームを組み、来月のクラウドファンディング公開に向けて準備を進めているところです。ホームレスワールドカップはご存じの方もいらっしゃるかもしれませんが、ホームレスを経験した方や現在ホームレス状態にある方だけでなく、障害のある方や、両親を亡くして児童養護施設で育った若者なども参加対象となっています。選手たちは大会を通じて、初めて海外に行き、温かいシャワーを浴びたり、海外の人と英語で話したり、新しい世界を知る機会を得ます。しかし、それ以上に大きいのは、ジンバブエ代表としてピッチに立つ経験だと思っています。それは、失われていた自信や自己肯定感を取り戻す大きなきっかけになります。私は、ただ選手を送り出すだけではなく、その後の就労支援までつなげていきたいと考えています。協力隊として活動できる間は、そこまで含めて取り組んでいきたいと思っています。



クラウドファンディングも来月の公開に向けて準備を進めています。私はまだ初心者なので、画像制作から広報まで、現地メンバーと相談しながら一つひとつ挑戦しているところです。今後クラウドファンディングが公開された際には、ぜひ活動をご覧いただき、「いいね」や情報の拡散などで応援していただけると嬉しいです。

<https://camp-fire.jp/projects/940250/view>

岸：ありがとうございます。ホームレスワールドカップに関わりのある方もいらっしゃるかもしれませんが、ぜひ水谷さんともつながっていただければと思います。クラウドファンディングはいつ頃スタート予定でしたか？

水谷：目標としては6月7日の公開を予定しています。

岸：もしご協力いただける方がいらっしゃいましたら、ぜひ応援をお願いします。何かご質問やコメントがある方はいらっしゃいますか。

緒方：ちなみに、日本代表も出場しているのでしょうか。初歩的な質問ですみません。何か国くらいが参加している大会なんですか。

岸：日本代表は「野武士ジャパン」ですね。安藤さんは関わられていましたか？

安藤裕一（(株)GMSS ヒューマンラボ）：いや、僕は直接じゃなくて、日本の野武士ジャパンのクラウドファンディングに応援させてもらったというのがあります。

水谷：70 か国ぐらい毎年参加されてるみたいです。

岸：水谷さんの場合はジンバブエでの活動ですので、A-GOAL として直接お手伝いできる部分は限られますが、A-GOAL のネットワークの中でご紹介したり、つないだりすることはできるのではないかと考えています。また、先週はケニアでキックベースの活動も行いましたので、その取り組みについてもぜひ見ていただければと思います。

IX. ケニアでのキックベース普及活動

緒方：先週、キックベース協会としてケニアを訪問し、「ケニア・キックベース・フェデレーション」という団体を設立しました。

来年開催されるアフリカンゲームズでは、キックボール（キックベース）が正式種目として初めて採用されることになっています。アフリカンゲームズは、いわばアフリカ版オリンピックのような大会です。その大会への出場も見据えながら、現在ケニアでキックベースの普及活動を進めています。

私たちキックベース協会の大きな目標は、キックベースを将来的にオリンピック種目にする事です。そのため、日本だけでなく世界各地で競技の普及に取り組んでいます。

今回も A-GOAL さんにご協力いただき、ケニアで学校の授業や体験会を実施しました。キックベースは、場所とボールさえあればできるスポーツです。そのため、まずは現地の大人の方々にルールを理解してもらい、コーチとして活動していただけるよう研修を行いました。現在は、コーチ養成のための仕組みづくりも進めており、ルールブックの提供や資格制度の整備などにも取り組んでいます。また、子どもたち向けの体験会も実施しました。キックベースの魅力の一つは、男女が一緒にプレーできることです。体格差の影響も比較的小さく、特別な用具も必要ありません。実際に、女の子たちが得点を決めて活躍する場面も多く見られました。

今後はケニアだけでなく、他の国々でも活動を広げていきたいと考えています。



岸：ありがとうございます。この取り組みも、もともとは緒方さんから A-GOAL にお問い合わせをいただいたことがきっかけでした。「ケニアで活動したい」というお話をいただいた時に、「それならキベラスラムでもできるのではないか」となり、実際に先ほどご紹介したリーグのグラウンドで実施することになりました。

緒方さんがおっしゃったように、キックベースは場所とボールがあればできるスポーツです。ただ、新しい土地で活動を始めるとなると、実際には場所を探し、用具を準備し、協力者を見つけ、子どもたちを集める必要があります。

そうした部分を、現地の A-GOAL メンバーと連携することでワンストップで実現できたというのは、一つの価値だったのかなと思っています。このような相談は最近増えてきています。

X. A-GOAL が目指すもの

そして、今後 A-GOAL として何を目指していきたいのかという話にもつながるのですが、例えば先ほどご紹介したユニ・チャームさんの事例があります。

ユニ・チャームさんは優れた技術や商品を持っていますが、現地とのネットワークはありません。一方で、A-GOAL には現地のネットワークがあります。その両者が連携することで、現在は実際に商品の販売も始まり、事業が広がりつつあります。そして、それによって現地で新たな雇用が生まれています。ケニアでは雇用不足が大きな社会課題の一つですので、こうした取り組みを通じて雇用創出につなげていければと思っています。また、企業との連携によるサッカー大会やプロモーション活動なども行っています。



さらに、A-GOAL のスポンサーでもある SARAYA さんとの連携事例もあります。

もともとは A-GOAL と SARAYA さんで活動していたのですが、最近では A-GOAL に関わる学生メンバーが「スナノミ症」の課題解決に取り組み始めました。

スナノミ症は、裸足で生活することが多い地域で、寄生虫が足に入り込み、炎症や化膿を起こしてしまう病気です。症状が悪化するとサッカーもできなくなってしまいます。

この課題解決に向けて、学生たちが「Waka Waka Kenya」という団体を立ち上げました。現在は、Waka Waka Kenya、SARAYA、A-GOAL の三者で連携しながらプロジェクトを進めています。

このように、A-GOAL が間に入ることで、人や団体、企業をつなぎ、新しい活動が生まれていく部分もあるのではないかと感じています。

アフリカ支援の分野では、最近「共創」が大きなテーマになっています。昨年開催されたアフリカ開発会議（TICAD）では、アフリカ各国の首脳が日本に集まり、アフリカの発展について議論が行われました。以前は「援助してください」という関係性が中心でしたが、今は「投資してください」という流れに変わってきています。単に援助を受けるのではなく、一緒に事業をつくり、それが現地の社会課題の解決につながる。そうした考え方がアフリカ側にもあり、日本の企業や団体の間でも共通のテーマになっています。

また、日本国内でも同じような動きがあります。最近、Jリーグ関係者を中心に「サストレコーチ研修」という取り組みが始まりました。スポーツを活用して持続可能な社会をつくる人材を育てようというもので、私も参加しています。

そこで語られているのが、スポーツには三つの力があるという考え方です。

一つ目が「アンプ力（発信力）」です。アンプは音楽のアンプから来ている言葉ですが、スポーツだからこそ注目を集めやすく、メディアにも取り上げられやすい。A-GOAL の活動もそうですし、ツンさんの活動もスポーツと結びついているからこそ、多くの人の目に触れている部分があると思います。

二つ目が「ボンド力」です。ボンド、つまり人や組織をつなぐ力です。スポーツは異なる立場や分野の人たちを自然につなげることができます。

三つ目が「レバレッジ力」です。少し見づらいなのですが、資料には「企業の免罪符から大義へ」と書いてあります。例えばユニ・チャームさんのような大企業が、なぜ A-GOAL と組むのかと思われるかもしれません。しかし、その間にスポーツが入ることで、企業も前向きに関わりやすくなり、一緒に挑戦しやすくなる部分があります。

こうした力によって、スポーツはソーシャルセクター、ビジネスセクター、パブリックセクターをつなぐ役割を果たせるのではないかと考えています。

A-GOAL では、

「スポーツを通じて

日本とアフリカをつなぎ、持続可能な社会を築く」というミッションと、「心の豊かさと選択肢を持



Mission

スポーツを通じて、日本とアフリカを繋ぎ、持続可能な社会を築く

Vision

心の豊かさと選択肢を持てる環境を作る

「環境をつくる」というビジョンを掲げています。スポーツを通じて、日本とアフリカの共創をさらに広げていきたいと考えています。A-GOALを拠点として、企業や団体、アフリカ各国のプロジェクトが集まり、それぞれがつながるようなプラットフォームをつくれたらと思っています。

さらに将来的には、アフリカだけでなく日本の課題にも挑戦していきたいと考えています。

アフリカでは、生まれ育った環境によって大きな格差があり、努力しても報われにくい現実があります。一方、日本は豊かな国ではありますが、閉塞感や孤立、自殺率の高さなど、別の課題を抱えています。日本とアフリカがつながることで、お互いが心の豊かさや選択肢を広げられる社会をつくれたらと思っています。



ただ、A-GOALだけでそれを実現するのは難しい。だからこそ、アフリカで活動する人たちと、日本の企業や行政、教育機関などをつなぎながら、同じビジョンを共有する仲間を増やしていきたいと思っています。

また、この後の懇親会でも構いませんので、「アフリカとのつながりを日本の教育や地域づくりにどう活かせるか」という点についても、ぜひ皆さんからご意見をいただければと思います。

本日お話ししたかった内容は以上です。

企業との連携や、多様な団体との協働を通じて、A-GOAL自身も持続可能な活動につなげていきたいと思っていますし、A-GOALだけではなく、連携によって活動全体が継続していく仕組みをつくっていかれたらと思っています。

拙い説明だったかもしれませんが、何かご質問があればぜひお願いします。

質疑応答

小堀：素晴らしい活動をされていることがよく分かりました。質問ですが、ケニア国内での A-GOAL の認知度はどの程度なのでしょう。また、ケニア企業との連携についても気になりました。将来的に現地企業からの支援を受けたり、現地市場とのつながりを広げたりする可能性はあるのでしょうか。さらに、定量的・定性的な評価についてですが、大学と連携して研究対象としてもらうという方法もあるのではないかと思います。そのあたりはどのように考えていらっしゃるのでしょうか。

岸：ありがとうございます。大学との連携については、私自身も現在、中央大学の研究グループに関わっていて、そうした取り組みを進めたいと思っています。もし皆さんのネットワークの中で興味を持っていただけそうな研究者や研究機関があれば、ぜひご紹介いただけるとありがたいです。ケニア国内での認知度については、リーグの規模拡大とともに確実に高まっています。キベラ以外の地域でも、A-GOAL リーグのことを知っている人は少しずつ増えてきています。また、ケン自身がサッカー界で幅広いネットワークを持っていて、最近ではスペインのクラブとの連携の話も出ています。

田口：そうですね。例えばナイロビにユースアカデミーを設立しようとしているスペインのクラブがあり、ケンもそのプロジェクトと連携を進めています。ケン自身の認知度やネットワークも広がることで、A-GOAL としても新しい機会が増えてきていると感じています。

岸：現地企業との連携についても、今後力を入れていきたいと考えています。立ち上げ当初はほぼ 100% 日本からの寄付や協賛で運営していましたが、現在は 7~8 割が日本から、残りは現地で調達する形になっています。現地の個人や事業者からも支援をいただけるようになってきました。今後はその割合をさらに増やしていきたいと思っていますし、将来的には 16 歳以上のカテゴリーをつくり、選手が海外移籍した際の移籍金なども循環の一部にできたらと考えています。

小堀：ありがとうございました。

岸：ありがとうございます。他にいかがでしょうか。オンラインの方でもご質問があればぜひお願いします。

ツン：一つ、よろしければ水谷さんにアドバイスをさせてください。私自身も資金調達にはいつも苦労しているのですが、クラウドファンディングをやる上で大事だと思っていることが二つあります。まず一つ目は、クラウドファンディングだけに頼らないことです。

クラウドファンディングはもちろん重要ですが、今は本当にたくさんのプロジェクトが並んでいて、その中で支援を集めるのは簡単ではありません。

私たちも被災地の子どもたちの招待事業などでクラウドファンディングを行いますが、それと並行して、小さな企業や団体にも直接声をかけています。

よく冗談交じりに、「ワールドカップのスポンサーになるには何億円も必要ですが、ワールドカップに行く子どものスポンサーなら 5 万円です」という話をするんです。意外と 5 万円なら応援したいと言ってくれる企業は多いんですね。

一社から 100 万円をいただくよりも、1 万円や 5 万円のスポンサーをたくさん集める方が大変ですが、長い目で見ると大きな財産になります。そうした企業は次の活動にも関わってくれますし、顔の見える支援につながります。

二つ目は、終わった後のフォローを徹底することです。例えば私たちは、パリ招待の事業を行った際、48 ページほどのカラー冊子を作りました。多くの団体はイベント実施までに全力を注ぎますが、終わった瞬間に終わってしまうことが多い。でも本当に大事なのはその後です。

精算書 1 枚で終わるのではなく、映像や報告書、冊子などで「その後どうなったのか」を伝える。私たちは、お金を集めるための労力を 100 としたら、終わった後のフォローにも 100 の労力をかけています。

クラウドファンディングは実施して終わりにになりがちなので、「クラウドファンディング以外の支援先を開拓すること」「終了後のフォローに力を入れること」。この二つがとても大事だと思います。

差し出がましい話かもしれませんが、ホームレス支援にも関わっている立場として、ぜひ頑張ってくださいと思っています。

水谷：貴重なアドバイスをありがとうございます。どうしても大きな支援先ばかりを意識してしまっていたのですが、小さな企業や団体にも丁寧に声をかけていくことの大切さを改めて感じました。また、集めて終わりではなく、その後の報告やフォローも大切にしながら取り組んでいきたいと思っています。ありがとうございました。

赤阪修（阪南大学）：貴重な重なお話をありがとうございました。Jリーグでレフリーを務めています。実は私も 1985 年生まれて、岸さんとは同級生です。先ほど中塚先生がお話しされていた内容にとっても共感しました。

研究の世界では、どうしても定量的な成果や数値が求められます。しかし、活動の価値というのは必ずしも数字だけでは測れません。エスノグラフィーやオーラルヒストリーのように、現場で起きていることを記録し続けること自体に大きな意味があります。無理に数字に置き換えるのではなく、一人ひとりの物語や活動の積み重ねを記録し続けることも大切だと思います。

もう一点、レフェリーについてです。リーグや大会が発展していくと、公平・公正な運営が非常に重要になります。特にレフェリーの育成が不十分だと競技の信頼性が損なわれますし、場合によっては不正や汚職の温床にもなりかねません。レフェリーを育てる人、その育成を支える人まで含めた仕組みづくりが必要だと思います。もし私にできることがあれば、ぜひ協力したいと思っています。

田口：ありがとうございます。私も、プレーヤーだけでなく、スポーツを支える人たちの存在が非常に重要だと感じています。ぜひ今後、一緒に検討させていただく機会があれば嬉しいです。

岸：実際にレフェリーはリーグ運営の中でも重要な役割になっています。ケニアでは失業率が高いため、レフェリーとして日当を得られること自体が貴重な仕事になっています。中には A-GOAL リーグで経験を積み、ケニアサッカー協会にレフェリー登録して、他の大会でも活動するようになった人もいます。少しずつですが、レフェリー人材も育ってきています。ぜひ今後ともよろしく願います。

土谷享（サロン 2002 理事）：「考え続けることの大切さを感じました。課題解決だけでなく、考え続ける課題そのものを豊かに包摂していくような大きなプロジェクトだと感じました。ありがとうございました。」（チャットでのコメント）

岸：ありがとうございます。課題があるからこそ、人と人がつながるきっかけにもなります。課題をネガティブなものとして捉えるだけではなく、みんなで考え続けながら新しい価値を生み出していくことができれば良いなと思っています。

新谷十穂子（郁文館高校2年）：本日はありがとうございました。私は昨年、ピエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラムで A-GOAL の活動を知りました。スポーツを通じて社会課題に取り組んでいることに感動し、今回も参加させていただきました。日本でもケニアでも、生まれた場所によって経験や機会に差が生まれてしまうことがあります。本来、人は平等に可能性を持っているはずです。そうした中で A-GOAL が行っている活動には大きな価値があると感じました。

岸：ありがとうございます。本質的なコメントをいただきました。

渡部拓郎（お母さま）：拓郎は今、提出期限の課題に追われていて発言できないのですが、代わりにお伝えします。今日のお話を聞いていて、実際に活動されている方のお話は本当に心に響くと感じました。また、支援を受けたケニアの女の子たちの話もとても印象的でした。拓郎も中学生になってサッカー部に入りましたので、また何か一緒に関われたら嬉しいです。

岸：ありがとうございます。横浜でもスポーツとアフリカをテーマにしたイベントを企画したいと思っていますので、ぜひよろしくお願いします。

中塚：今日は本当にありがとうございました。A-GOAL の活動も、被災地支援のお話も、大変勉強になりました。また、比較的時間のある私たちシニアが関われるプロジェクトとしても大きな可能性を感じました。

さらに印象的だったのは、高校生やケニアの若者たちが、自分の考えをしっかりと語っていたことです。思ったことを物怖じせずに伝えられる力は、年代に関係なく大切です。最近では日本の若者が以前より発言しなくなったと感じることもありますが、そうした力を引き出していくことも私たち大人の役割なのかもしれません。

安藤：一つだけ。このプロジェクトは本当に素晴らしいと思っています。ただ、キベラスラムを「自分たちの問題ではない」と考えるケニアの人たちが少しでも減っていくような活動になれば良いとも思っています。最終的には政府を動かし、キベラの環境が改善され、スラムそのものがなくなっていく。そんな方向性も一つの目標になるのではないのでしょうか。

中塚：ありがとうございました。

では場所を変えて、続きの話をしましょう！

（近くの居酒屋での懇親会に続く）